

人はなぜ劇場に足を運ぶのか？  
「芝居をみると、皺がのびる、腰がのびる、寿命がのびる」。劇作家の井上ひさしさんは戯曲の中でこう語っている。「観劇」は「感激に通ず。いい芝居に出会うと、心揺さぶられ、泣いて笑って表情豊かに「明日もがんばって生きよう！」と背筋が伸び、心の栄養をいただき、寿命も延びる。演劇鑑賞会に80、90歳を過ぎてもお元気な会員が多いのは、演劇の効用の一つかもしれない。

神戸演劇鑑賞会事務局長

大谷 紫乃

# 市民による演劇守るために

ち寄り、年7回の演劇公演(例会)を楽しんでいる。「楽しむ」といっても、ただ「観る」だけでなく、座席券や会報作り、仲間を広げる取り組みなどの準備も会員自ら行っている。例会前後には地域やサークルで集い、作品を深めたり感想を語り合ったり。老若男女、職業問わず、芝居を通して人生や「時代」を語り合うことができるのも会の魅力である。

見る  
思う



業問わず、芝居を通して人生や「時代」を語り合うことができるのも会の魅力である。

このような会は現在、全国に127あり、13万人の会員がいる。

歴史ある団体となっている。

長い歴史の中、財政難など幾多の困難を会員の力で乗り越えてきたが、外的要因により2度、解散の危機に見舞われた。1度目は1995年の阪神・淡路大震災。当初は芝居どころではなかった。しかし「震災を受けた今こそ、1人でも多くの人に芝居を」と、劇団や全国の仲間にも支えられ、あの年の10月、再開を果たした。

2度目は、まさに今だ。開館以来45年間、例会場として使ってきた神戸文化ホールの移転計画である。全国にはホール改修による長期閉館のため、解散を余儀なくされた鑑賞会もある中で、神戸に新しい劇場ができるのは喜ばしいことである。しかし、現計画では7年後、大、中ホールが別々の高層

ビルの一角に入り、特に中ホールは音楽専用となる予定で、客席数も含め、私たちにとって今の条件で例会を続けていくのが難しくなる問題を抱えている。

私たちにとって劇場とは？

私は誰もいなくなった真つ暗な客席に一人、いるのが好きだ。目を閉じれば、先ほどの舞臺の興奮と余韻が、劇場の鼓動のようにこだましている。それはより豊かに人間らしく生きたいという人々の祈りのように聞こえる。

劇場とはただの「ハコ」ではない。神戸で演劇を仲間と観る喜びを未来につなげていくために、今何をすべきか、私たちは考え始めたところである。